



の中の

子どもたち

第17回

ファイ 悪魔に育てられた少年 — 極限の“父と子” —

川崎 二三彦

サスペンス

朝一番の新幹線で京都から横浜に到着し、午前中、ある事件の公判を傍聴した後、午後から東京で開かれた会議に出席したら、夕方になった。少し疲れが残っているこんな時には娯楽作品がいいのじゃないか、と思って見たのが本作品だ。

宣伝文句に「超震撼サスペンス・アクション」などと銘打つだけあって、軽く食事をしたついでにビールも飲んでいたけど、眠気など忘れて見入ってしまった。

この手の映画を見慣れているわけではないので、他作品と比べて論じるわけにもいかないし、そもそも私が銃撃戦がどうのこうのと並べ立てても何か不似合いだろう。ただし、本作品のために映画館に足を運んで損することは決してない、とだけは言いたい気分だ。

こんなことを書いていると、「おや、今回は『映画の中の子どもたち』とはあまり関係なさそうですね」などと突っ込まれそうだが、実はご明察。読者は筆休め原稿のつもりで読まれたい。

悪魔に育てられた少年

とはいえこの作品、副題に「悪魔に育てられた少年」とあるように、単純なアクション映画というわけでもない。

『悪魔』なんぞという表題からして、何となくおぞましい雰囲気がある。それにファイって何のことや

タイトルを見て、気持ち的にはいささか引き気味だったが、少年は意外にも心優しく、映画に「悪魔」は登場しなかった。少年を育てたのは確かに犯罪者であり、「白昼鬼」と呼ばれるような「鬼」ではあっても、「悪魔」ではあるまい。だからこの副題は、客引

き目当ての日本の興行主が勝手に入れたんじゃないかと邪推した。

5人の父親

さて、予備知識を全く持たないで見たせいか、少年ファイが、5人の男たちを誰彼なく「パパ」とか「父さん」と呼ぶのには面食らった。私は最近、とみに物覚えが悪くなっているの、恥ずかしながら、「はて、さっきパパと言われていたのは聞き間違いだったかな」などと混乱したが、本作品では、5人の男の誰もがファイの父親という設定なのである。



それにしてもこの映画、私のように迂闊な人間にとっては、ちょっと油断しただけで、一瞬理解が遅れてしまう。

「おい、まだ子どもだろ」

スリリングなカーチェイスだって、最初どうしてファイが運転しているのかわからなかったが、この5人は、それぞれが犯罪行為のための凄技を持ち合わせており、こうした技術をファイ少年に逐一教え込んでいたのである。それでようやく映画の趣向はわかったのだけれど、では、どうして彼らは、単なる犯罪集団ではなく、5人ともがファイの「父親」でなければならないのか。

思うに、「白昼鬼」リーダーのソクテが児童施設の出身だったというから、この5人はきっと、施設の中で辛酸をなめ、互いに励まし、あるいは傷を舐め合い、何とか生き延びてきた仲間ではないだろうか。無慈悲な犯罪と、ファイに対する奇妙な愛情が混ざり合う秘密はそこにある。

「あっ、だから悪魔なのか？」

などと勝手な考えを巡らせていたら、いつの間にか本作品は、「超震撼サスペンス映画」から「家族とは何かを問いかける秀作」に変身しているのではないか。

2人の父親

こうして私は、凶悪な犯罪者集団が誘拐した当の子どもを育てるという摩訶不思議な状況を受け入れていくのだが、物語はこの後、これぞまさに“映画”という展開をみせる。

「白昼鬼」が請け負ったのは、土地再開発で儲けようと企む悪徳業者からの依頼。立ち退きを拒む夫婦を消してしまえというのである。

「殺してみろ」

「撃て！」

「撃つんだ!!」

犯行現場に連れて行かれたファイは、抗い難いソクテの声に震え、おびえ、ついには男にむけて何発もの銃弾を放つ。しかしそれは、育ての親ソクテの命令によって実の父を殺害する行為に他ならないのであった。

映画は一転、全てを知ったファイと5人の父との壮絶な戦いへと突き進み、クライマックスを迎えるのだが…



「父さん、なぜ僕を育てたのですか……」

「おまえは、俺たちと同じ怪物になる運命なんだ」

飛び飛びに聞こえてきた2つの台詞は絡み合い、交錯し、本作品を通底するテーマを象徴的に示していたのである。だから破滅寸前のファイが5人の父に挑むアクションシーンは、単なる観客サービスというだけでなく、非現実であるのに妙なリアリティを持って胸に迫り来る。そのシナリオの見事さに、私は感嘆してしまう。

ヨ・ジング

ところで、17歳の少年ファイを演じたヨ・ジングは、韓国の新人男優賞をいくつも受賞したというが、納得だ。何しろ彼は、誘拐された幼児が小学生になったという想定で、自らをファイに置き換えて日記を書いたというのだから、その役者魂、もしくはプロ意識に感服した。しかも、撮影当時はまだ15歳だったというから驚かされる。

*

などとあれこれ書き連ねてきたけれど、本原稿はもたもたして、映画のスピードとテンションに完全に負けている。皆様、こんなものを読む暇があれば、早く映画館に足を運んで本作を見てみましょう。私も、もう一度見たくなった。

* 2013 / 韓国

*鑑賞データ 2014/05/19 シネマート六本木

*公式 HP <http://www.hwai-movie.net/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/36247>

第1回	プレシャス	* 題名を click すると本文へ移動します。
第2回	クロッシング	
第3回	冬の小鳥	
第4回	その街の子ども	
第5回	八目目の蟬	
第6回	いのちの子ども	
第7回	ラビット・ホール	
第8回	サラの鍵	
第9回	少年と自転車	
第10回	オレンジと太陽	
第11回	孤独なツバメたち	
第12回	明日の空の向こうに	
第13回	旅立ちの島唄	
第14回	くちづけ	
第15回	もうひとりの息子	
第16回	メイジの瞳	